

《公開講演》 2004年7月11日(日)

日本語表現の原動力としての漢文訓読

石塚晴通*

漢文訓読は、漢文を自言語で理解することでは翻訳と似るが、漢文構文の原表記を残したまままで其れによりかかりながら自言語で理解するといふ点で翻訳とは異なる。訓読は、特殊な、しかも巧みな言語活動である。漢文訓読は、日本語のみで行はれたわけではなく、他言語による訓読も行はれた⁽¹⁾。

漢文の自言語による訓読に関する国際会議は、1986年のハンブルグに於ける国際アジア北アフリカ人文研究会議を始めとして、以下の如く開催されて来た。

1. Panel 10 “Devices for Reading Chinese Text among the Neighbouring Peoples”, 32nd International Congress for Asian and North African Studies, Hamburg, 1986 (Convener: ISHIZUKA Harumichi) → “The Proceedings of 32nd International Congress for Asian and North African Studies”, Franz Steiner Verlag Stuttgart, 1992
2. (第1回) アジア諸民族の文字に関する国際学術会議、Seoul、1996 (大会長：南豊鉉) → 口訣学会『アジア諸民族の文字』、太學社、Seoul、1997
3. 国際 Workshop “漢文古版本とその受容(訓読)”、札幌、2001 (主催者：石塚晴通) → 平成14年度科学研究費補助金間接経費『漢文古版本とその受容(訓読)』、札幌、2002

4. (第2回) 国際学術大会 “漢文の受容と訓法”、Seoul、2001 (運営者：金永旭)
5. 日韓漢字・漢文の受容に関する国際学術会議、富山、2003 (主催者代表：藤本幸夫) → 日韓漢字・漢文の受容に関する国際学術会議実行委員会『日韓漢字・漢文の受容に関する国際学術会議』、富山、2003
6. 北海道大学大学院文学研究科 “日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開”、札幌、2004 (実行委員長：石塚晴通)
7. (予定) 東方學會50周年記念国際シンポジウム「漢文の自言語による訓読」、東京、2005.5.20 (企画者：石塚晴通)

以上の外にも、多少は小規模の会議も行はれてゐるが、主なものは以上で総てである。従つて極く新しい研究分野であり、専門研究者も多くはない。1のハンブルグのPanelでは、参加者は殆どが日本学者であり、中国語・中国文学・中国哲学・中国歴史等の研究者は皆無であつた。その中で、南豊鉉氏による韓国口訣資料(古代朝鮮語ニヨル漢文訓読資料)に関する発表は注目を集め、活発な質疑が行はれた。南氏には馴れない英語による質疑は誠に気の毒であつたが、筆者にとっては正に此の研究分野を国際的に認知せしめた実感を得た。それから10年して、Seoulで2が開催された。これについては、李基文先生(Seoul大学校名誉教授)が日本の訓点語学会に出席され、非常に感心され、韓国でも此のやうな学会を創るべき由を教へ子の南豊鉉氏に話されたのが契機であつた。200

*北海道大学大学院文学研究科教授

人に及ぶ盛大な国際会議であつたが、参会者の中には純粋な学術会議とは異なる民族感情吐露の如き側面もあつた。それから5年して、3を開催した。実は2の閉会式で南豊鉉大会長が次回は札幌で開かれる由を、筆者と何の相談もなく突如言ひ出され聊かあわてた。但し、国際会議を開くからには確実に進歩した成果が見込まれぬ限り、開催には踏み切れない。従つて進歩の度合を計つてゐる内に、2000年2月に日本の西村浩子氏が Seoul に於て角点口訣を発見され、その師小林芳規氏に話されたところ、その7月に Seoul を訪れ西村氏と共に角点資料調査をされてゐる中で、角点のヲコト点の如き符号を発見されるといふ画期的事態が訪れた。誠庵古書博物館や湖林美術館蔵の高麗古版・初彫版・再彫版華嚴經・瑜伽師地論、また延世大学校蔵の高麗古版法華經等にも角点符号口訣が続々と見つかった。これにより、3の国際会議開催に踏み切つた。この時は、韓国から17人が参会され、口訣資料の専門家の外にも、韓国語史の専門家である高永根 Seoul 大学校教授、鄭光高麗大学校教授、南星裕韓外国語大学校教授、金永萬嶺南大学校名誉教授やアルタイ語学の金周源 Seoul 大学校教授等が含まれ、ヘルシンキ大学ヤン・フーネン教授、又ウイグル語の世界的権威庄垣内正弘京都大学教授も活発に議論に参加され、多大な成果が上つた。これについては2の Seoul 会議の経験から、未だ評価も定まらない分野で、純粋に学問的発表や質疑に集中する為には純粋の研究者に限つた非公開会議としてマスコミも一切シャットアウトしたことが成功の要因であつた。但し、前記韓国語史の著名教授達のこれらの発表・質疑を見る目は誠に冷ややかで、また資料の無いところを溯つて推論する時の手続きとして言語学的に如何に面倒な作業をするかを見て貰ふ意味で、前記庄垣内正弘教授に14世紀ウイグル語資料から7・8世紀に溯るウイグル語による訓読の証明を試みた発表

をして貰つたのであるが、これらには関心を示されず、この段階に止つてゐた。4は其の年の内の4ヶ月後に開かれた国際会議であるが、各発表は4ヶ月前より確実な進歩を見せ感心させられた。この会議には小林芳規氏も参会され、マスコミの取材もあり、また会議に合せて『朝鮮日報』の一面トップにハングルの祖は口訣にありとする記事が掲載された為、純粋な学術会議とは行かない一面も生じた。5は、3の会議の節に次回は韓国語朝鮮語学・書誌学の権威藤本幸夫氏の御いでのなる富山大学で2年後に開くことを決めたことに基く国際会議であつた。ユネスコ東アジア研究センターの共催会議でもあつた為、外国から韓国勢30数名、ベルリンからウイグル語・書誌学のチーム教授、国内からも梅田博之麗澤大学教授、前記庄垣内正弘京都大学教授等著名研究者も招待され、盛大な会議となつた。但し、ユネスコの催物の常として一般市民への弘報活動が重視され、また小林芳規氏の発表内容が発表と同時に（質疑の前に）インターネット通信で流されたりと、純粋な学術会議とは異なる一面もあつた。6は、筆者の北海道大学定年退職記念として催された国際会議であるが、漢文訓読の分野では著名な沼本克明広島大学教授の外に、日本の訓点語学会の次世代を背負ふ木田章義京都大学教授、小助川貞次富山大学教授、大槻信京都大学助教授、又韓国の口訣学会の最前線の研究者である朴盛鍾関東大学校教授、鄭在永韓国技術教育大学校教授、金永旭 Seoul 市立大学校教授、朴鎮浩漢陽大学校講師、張景俊延世大学校博士課程学生の充実した発表があり、また尹幸舜 Hambat 大学校副教授、呉美寧崇實大学校副教授の如く日韓両語に亘る訓読資料を扱ふ発表もあり、活発な質疑を通じて明かに新しい研究段階に至つてゐることを印象づけた。尚、この国際会議は市民に開放し、質疑への参加も許したが、学問的関心以外の発言は皆無で、学問的内容に終始した。7

は、東方學會の50周年記念の催物の一として開催される国際シンポジウムである。中国語・中国文学・中国哲学・中国歴史・漢文の専門家は、訓点は学力の低い者の所産と見る傾向があり、従来日本の訓点資料をこれらの分野で活用することが少なかったことに鑑みて企画したもので、天武朝以来代々の古写本・古訓点を伝えてゐる日本の古写・古訓点資料を用ゐることで、これらの研究分野の新展開が確実に見込み得ることを印象づける為の企画である。

前述の如く、極く新しい研究分野であり、国際的にも発展性豊かな分野である。本稿は、それらの背景を踏まへて、日本語表現の原動力としての漢文訓読を解明しようとするものである。

二

日本語による書き言葉は、固有の文字表現を有たなかつた言語の宿命として、受容した漢字・漢文の制約を当初から強く受けた。古事記序に日本語文を表現・表記する苦心が

已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長、是以、今或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録、

の如く述べられてをり、句の単位では漢文的措字法が基本であり、全面的に漢文で表記した部分もあつた。従つて書き言葉は、漢字・漢文の制約を強く受けて始まり、漢文の訓読によつて生れた日本語表現の語法も山田孝雄『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』（宝文館、1935）等により夙くから指摘されてゐる。

漢文訓読の日本語の制約的性格を例示すると、漢書卷第五十七楊雄傳上の初めの部分「超既離虜皇波」に対する上野本天曆2年(948)点(図1)を見ると、「離」字の右の朱点では「フ」と訓み、左の墨点では「イル」と訓んでゐるが、これらはそれぞれ顔師古割注の「離歴也」と脚注書込漢書訓纂注の「離入也」に基く、それぞ

れ「歴」と「入」との常用訓「フ」と「イル」とである。また仏典でも、鳩摩羅什訳妙法蓮華經藥王品の「最為深大」の部分を立て本寺本寛治元年(1087)点では「最トモ^{是也}為レ深大なり」と訓み、龍光院藏院政期点でも「為れ」と訓んでゐるが、これは慈恩大師窺基撰『法華為爲章』(図2、叡山文庫本)の注記「最為深大 是」に基く、「是」の常用訓「コレ」である。つまり、訓みとしての日本語は漢文注に強く制約されてゐるのである。

10世紀の初めに和文が創始されるのであるが、和文は話し言葉の要素を取り入れながらも漢文訓読文から離れることを主眼として俗語等も排除してをり、決して口語文体ではない。漢文訓

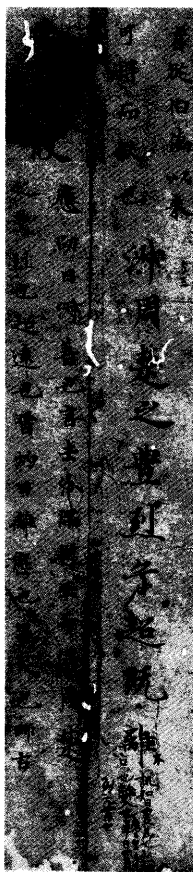


図1：上野本漢書楊雄傳



図2：叡山文庫藏
法華為爲章

Opregt Onderwys	読法	オブレキト	オンデルウエイ	インデ
正訓		レッテルコンスト		
in de	訳言	インデ（助辞ナリ。下ノ言ヲ上ニ接スルナリ。）		
○				
Letter Konst	切意	字字ノ正訓（是書ノ題号也）		
字学				

図3：“蘭化亭訳文式”

読語彙語法が和文語彙語法と対立したものであることは、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会、1963）によつて画期的に解明されたのであるが、漢文訓読語彙語法の方が先に成立してをり、和文語彙語法は如何にしてそれらから離れて生み出されたかといふ視点で見直す必要があらう。

日本の知識人が欧文も漢文訓読と同様にして理解して来たことは森岡健二『欧文訓読の研究』（明治書院、1999）によつて解明され、例へば前野良沢『和蘭訳筈』付録“蘭化亭訳文式”（図3）には、語順と概念とが詳しく示され、助辞は正訳し難きものとして○が付されてゐる。つまり欧文も漢文訓読と同様にして理解してゐるわけであり、これが現代人の外国語文受容にも強く尾を引いてゐる。漢文訓読の学習形態が其の後の外国語文受容に強く影響し、概念把握等の知識面では強いが、実用面では弱い特徴を形成するに至つてゐるのである。

三

日本語では古来、新しい概念を訓読により造り出して来た。例へば、「おほきみ」といふ表現は元来の日本語には無く、朝鮮半島古代伽耶諸国の土器等に少なからず見られる「大王」の訓読によつて「おほきみ」が造り出され、「きみ」の上位概念を表はす語となつた。

日本最初の民族詩人と呼ばれる柿本人麻呂の表現にも、「訓読」によつて造り出されたと思

はれるものがある。例へば、

伊田何 極太甚 利心 及失念 恋故

（柿本朝臣人麻呂之歌集）万葉十一-2400

の「ここだはなはだ」といふ表現は、中国口語起源の二字副詞「極甚」の訓読語として造り出されたものである可能性が高い⁽²⁾。「はなはだ」自体が「甚」の訓読語であり、「ここだはなはだ」といふ表現は人麻呂以前には無く、中国語としても新しい表現である「極甚」を訓読して巧みに造り出したものであらう。

源氏物語の表現は和文の極であり、漢文訓読文の対極とも言へるが、「訓読」によつて造り出された表現が少くない。既に竹内美智子『平安時代和文の研究』（明治書院、1986）によつて源氏物語には複合語彙の多いことが指摘されてゐるが、込み入つた概念や感覚を表現する複合語彙を「訓読」に基いて造り出してゐる可能性が高い。「くまなし」「すみはつ」等の源氏物語初出語彙や源氏物語独特語彙の背後に白氏文集等の所用漢語を考へるべきものがあり、それらの「訓読」により新しい和語を巧みに造り出して和文に綴り込んだものであらう。

以上の如く、日本独特の勝れた文藝作品の表現を生む原動力として漢文訓読が作用した側面を今少し掘り起して考へてみる必要がある。

日本書紀古訓は、漢文体の日本書紀を徹底的に和語で「訓読」した所産であり、阪倉篤義『語構成の研究』（角川書店、1966）に於て日本語構成研究の基本資料とされた如く、豊富な和語表現が見られる。但し、石塚晴通『図書寮本

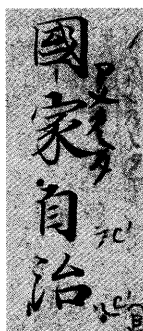


図4：岩崎本
日本書紀「国家」

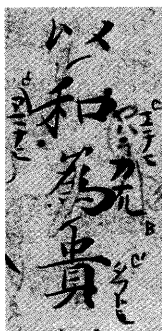


図5：岩崎本
日本書紀「和」

日本書紀 研究篇』(汲古書院、1984)が指摘する如く、日本書紀古訓を資料として用ゐる際には系統と年代性とを常に配慮する必要がある。例へば、

天地開闢……皇極紀四年六月

の「天地」は、岩崎本平安中期点によれば「天__地」と二字の左側に合符が加添されてゐるので、「アメツチ」といふ一語ではなく、「アメ(ト)ツチ(ト)」といふ二語であつたことが判明する。これに対して、推古紀十二年四月の有名な十七條憲法の中の「国家」は、岩崎本平安中期点で「^{アメノシタ}国一家」と二字の中央に合符が加添されてゐるので、右訓「アメノシタ」は一語であつた(図4)。また、十七條憲法冒頭の「以和為貴」の「和」には、岩崎本平安中期点「ヤハラクなる」、同院政期点「(ヤハラ)カナル」、同一條兼良宝徳三年点「アマナヒ」、同一條兼良文明六年点「(合点)アマナヒ」(図5)、図書寮本永治二年頃点「ヤハラキ」と加添されてゐるので、十七條憲法の根本理念も平安時代中期の明経道及び院政期の紀伝道では「おだやか」、院政期の明経道では「柔軟」、室町時代の一條兼良に到つて「一致」と変遷が見られたことが判明する。

漢文訓読に基いて新しい表現を獲得することは、幕末明治期の欧米新文明の受容に当つても大きな威力を発揮した。欧米の新概念の翻訳に当つては98%以上が漢語であつたが、これらの漢語には陳力衛『和製漢語の形成とその展開』(汲古書院、2001)が説く如く、漢文訓読に基いて造り出された漢語が多く含まれてゐる。例へば、「心配」は「ココロラクバル」に基いて、「改札」は「フダヲアラタム」に基いて造り出され、「完走」「皆勤」「直行」の如く中文としては語になり難いもの一語として造り出す原動力は「訓読」であつた。これら訓読に基いて造り出された新漢語の多くが、中国でも用ゐられるに至てゐるのである。

四

以上を要するに、

- ・漢文訓読は、翻訳とは異なる言語活動であり、日本語以外でも行はれた。
- ・漢文訓読語彙語法は、漢文学習の制約を大きく受けたものである。日本の知識人の外国語受容は、漢文訓読の影響を受けて来た。
- ・最も日本的と思はれてゐる文章表現にも漢文訓読に基いてゐるものがある。新しい日本語表現を造り出す原動力として漢文訓読を解明する必要がある。

注

- (1) 『訓点語辞典』(東京堂、2001)“総論”(執筆者：石塚晴通)。
- (2) 人麻呂作歌の表現にも訓読語があるとする示唆は、2003年8月の万葉七曜会の筆者の研究発表に於て日本書紀の中国口語起源の二字一語を取り上げた際に、出席されてゐた福岡耕二氏の指摘より受けたものである。

■第6回国際日本学シンポジウム実行委員とスタッフ

シンポジウム実行委員

- センター長：高島 元洋（国際日本学）
- 専任教授：ロール・シュワルツ＝アレナレス（比較日本学研究センター助教授）
- センター運営委員会：小風秀雅（国際日本学）、森義仁（理学部）、徳井淑子（生活科学部）、石丸昭二（文教育学部）、相原茂（比較社会文化学）、岡崎眸（国際日本学）
- センター研究員：内田忠賢（国際日本学）、神田由築（国際日本学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、森山新（国際日本学）、鈴木禎宏（比較社会文化学）、頼住光子（国際日本学）、浅田徹（国際日本学）、和田英信（比較社会文化学）、中村美奈子（舞踊教育学）
- 平野由紀子（国際日本学）
- 秋山光文（比較社会文化学）

- 1 広報・ポスター係……高島元洋・大久保紀子
- 2 会場・機材係……小風秀雅・内田忠賢
- 3 受付・湯茶係……(受付) 松田文子・福田千絵・丁莉
(湯茶) 佐藤明子・井上登喜子・倉光ミナ子
- 4 「比較日本学研究センター研究年報」作成係
……新井由紀夫・浅田徹・大久保紀子

■協 賛

サントリー音楽財団
お茶の水女子大学厚生協力会